

# ブラジル人児童の受身表現の習得に関する 実証的研究

—産出反応の分析に基づく考察—

田口 香奈恵

キーワード ブラジル人児童、日本人児童、受身表現、発達順序

## 1. 目的

本稿は、日本に在住するブラジル人児童の日本語受身表現の習得過程について明らかにしようとするものである。田口（2002）では、小学校前に来日し滞り期間が長い子どもほど受身表現を産出しやすいことを明らかにしたが、正答率を中心に考察を行い、それ以外の反応（誤反応）については十分な分析はされていない。そこで、どのような反応があったのかを助詞と文末の関係を中心に記述・分析し、受動態を用いた文がどのような順序で習得されるのかを考察していく。

外国人児童の受身表現習得について助詞とともに言及しているものには、鴻野（1998）、松本（2000 a, b, 2001）、田口（2001）がある。しかし、これらの中で、助詞と文末（受動態）との関係を明記しているものは少ない。

鴻野（1998）では、受身表現を産出させようとした際に3つの発話パターンが観察されている。一つは、「おじいさんが（正用:に）怒られました」のような、受身形を用いながらも格助詞の使い方を誤ってしまい、描写すべき絵の内容とは異なる表現として不適切なものである。もう一つは、受動文にすべきところを能動文を使った反応が半分以上あったことを報告している。この2つのパターンのうち後者の受動文にすべきところを能動文にしたという反応に類似したものが、田口（2001）でも頻繁に出現している。この点から受身表現を習得する過程で、最初に能動文が現れることが考えられる。そして、「動詞の態を間違えずに産出できる表現は、格助詞も正確に習得している（p.127）」と、受身形と格助詞が同期することを示唆している。

一方、成人の受身習得を調査した森山（2000）は、「能動態→（動作主）二格+能動態→受動態」の順で移行していくことを明らかにした。さらに、能動態から受動態への移行に際して、「（動作主）二格+能動態」は現れても「（動作

主)「格助詞+受動態」は現れないことを指摘している。この点は、鴻野(1998)の結果と異なっている。

同じく成人のヴォイスの習得について研究をした田中(2001)では、「日本語のヴォイスは格助詞とセットになっている(p.246)」ことを指摘している。ヴォイスの習得過程は、最初は能動文が出現し、次の段階でヴォイスの機能面に気付き始め、次第に正しい形で定着していく。また、格助詞が誤ったまま定着する場合や能動文より先に習得が進まない場合があることも明らかにした。正しい形で定着していく過程では、一度は正しく使えたものでも、ヴォイスは残るが格助詞が曖昧になったりすることも指摘している。

そこで、本稿では受身表現を習得するプロセスについて次のような仮説を立て検証していくことにする。

仮説：受身表現を習得していく基本的な発達プロセスは、以下の順序を辿る。

- ① (動作主)助詞(ニ以外)× + 文末動詞の態×：能動態
- ② (動作主)助詞(ニ)○ + 文末動詞の態×
- ③ (動作主)助詞(ニ)○ + 文末動詞の態○：受動態

最初の段階(①)では、動作主を表す助詞も文末の動詞の態も誤った形式で現れる。それは主に「能動態」として出てくることが考えられる。次の段階(②)では、動作主を表す助詞「ニ」は正しく産出できるようになるが、文末部分ではまだ受動態は出てこない。そして、最後の段階(③)で、助詞も文末部分も正しく産出することができるようになる。つまり、受身表現を習得していく基本的な発達プロセスは、文末の受動態ではなく動作主を表す助詞「ニ」から先に習得していくと仮説を立てる。

## 2. 調査方法 —横断的調査—

### 2.1 調査対象児

調査対象児は、小学2年生～小学6年生のブラジル人児童55名と、小学1年生～小学3年生(小1：95名、小2：96名、小3：92名)の283名の日本人児童で、どちらも岐阜県内の公立小学校に通っている子ども達である。日本人児童を調査対象としたのは、ブラジル人児童の通う公立小学校で一緒に生活している日本人児童らがどれくらい受身表現を産出できるか、比較するためである。表1はブラジル人児童の各グループの平均滞日期間と平均年齢、平均来日年齢を示している。ブラジル人児童は全員平仮名が書けて読める子ども達である。

表1 ブラジル人児童の滞日期間別平均年齢・来日年齢

	2年未満	2～4年	4～6年	6年以上
人数	13人	15人	13人	14人
平均滞日期間	1.36年	3.33年	5.19年	7.92年
平均年齢	10.08 (1.38)	9.66才 (1.67)	9.69才 (1.65)	8.92才 (1.54)
平均来日年齢	8.71才 (1.43)	6.33才 (1.94)	4.42才 (1.66)	1.17才 (1.20)

(平均年齢、平均来日年齢の括弧内は標準偏差)

## 2.2 調査材料

調査に使用した受身表現は12の表現である。分類は、寺村(1982)、工藤(1990)による。

- 【直接受身：ひと】
  - ・たろう君はお母さん（に）おこられる
  - ・よし子さんはたろう君（に）たたかれる
  - ・たろう君はドア（に）はさまれる
  - ・たろう君はお父さん（に）ほめられる
  - ・たろう君は犬（に）おいかけられる
  - ・よし子さんはたろう君（に）つかまえられる
- 【直接受身：もの】
  - ・新しい星がはつけんされる
  - ・世界中でコンピューターがつかわれる
- 【間接受身：持ち主】
  - ・たろう君は犬（に）手（を）なめられる
  - ・たろう君は鳥（に）帽子（を）とられる
- 【間接受身：不利益】
  - ・たろう君は犬（に）にげられる
  - ・お母さんは雨（に）ふられる

## 2.3 手続き

調査の手続きとしては、子供は絵を見て、その絵に合うように文を完成させる。助詞は「を」「が」「に」の中から1つ選ぶ。文末は、語頭が提示してあるのでその続きを書く。具体的には、前節「調査材料」の助詞（ ）が選択部分に、文末の下線部が空欄になっている。「なめられる」「取られる」では助詞の選択箇所は2カ所、「発見される」「使われる」では助詞の選択はない。問題の提出順序は、上記の分類とは関係なくランダムであるが、どの子どもに対しても同じ順序で提示している。

### 3. 結果と分析

#### 3.1 助詞と文末の4つの関係

ここでは、ブラジル人児童と日本人児童の結果から、どんなタイプの反応があったかをまとめる。本調査は、動作主を表す助詞の選択をし文末の続きを書いて受身表現の文を完成させるというものであった。本調査の「正答」とは、「助詞の選択、文末の動詞の受身形活用ともに正しい場合」のことを指す。この助詞の正誤と文末の動詞部分の正誤を組み合わせると、表2のように4つのパターンができる。

表2 助詞と文末の動詞部分との組み合わせ

		動作主を表す格助詞	
		誤答 (×)	正答 (○)
文末の動詞部分	誤答 (×)	助× 動×	助○ 動×
	正答 (○)	助× 動○	助○ 動○

この4つのパターンに基づいてブラジル人児童と日本人児童の産出反応について表したものが図1である。ブラジル人児童全体の正答率が高い表現を左から順に並べてある。なお、助詞の選択がなかった【直接受身：もの】に分類される2つの表現「発見される」と「使われる」はここでは取り上げていない。

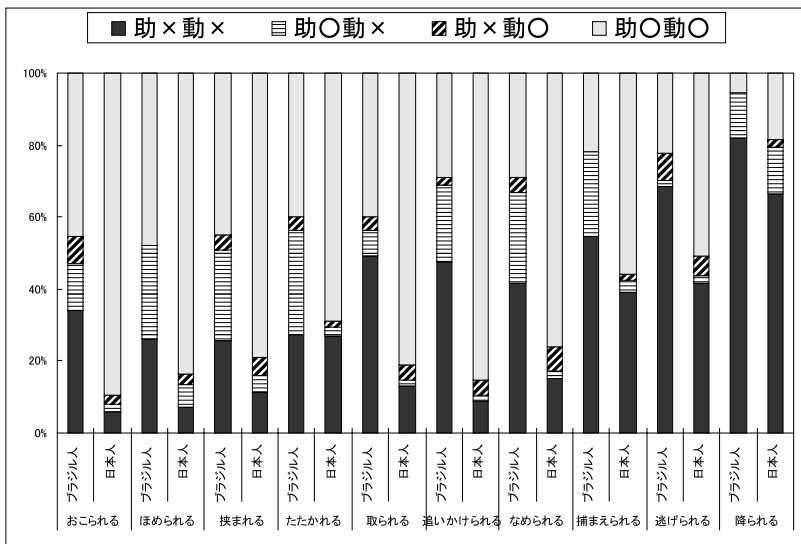


図1 ブラジル人児童と日本人児童の産出反応  
：助詞と文末動詞態の4パターンの組み合わせ

ブラジル人児童においては、「たたかれる」以外の表現は、助詞の選択と文末部分両方の誤り（助×動×）のパターンが最も多い。「たたかれる」より正答率が低い表現は、正答率が低くなるにつれてこのパターンの比率が高くなっている。産出されにくい表現では、助詞の選択と文末の動詞を受身形にする部分両方の課題が容易ではなかったことがわかる。

ブラジル人児童の産出反応パターンで次に多かったものは、助詞の選択は正しいが文末部分は誤りである（助○動×）というものである。最も割合が低かったものは、助詞の選択は誤っているが文末部分は正しいという組み合わせ（助×動○）である。

日本人児童においても、ブラジル人児童と同様の傾向がある。助詞の選択と文末部分の両方が誤りのパターンが最も多く、正答率が低かった表現ほど、このパターンを取っている。

### 3.2 文法的には正しいが受身を使っていない表現（以下、他表現）

前節でとりあげた4つのパターンに当てはまらない反応があった。それは、助詞の選択、文末ともに文法的・意味的には正しいが、授受表現など受身形以外で回答しているものである。本来ならば正答である反応だが、本調査の「正

答」である「受身表現の文を作る」という点に反するので、「正答」から外して考えることにする。12表現中9表現から産出されており、そのタイプはブラジル人児童、日本人児童に共通している。その中でブラジル人児童の2人以上からあった反応を表3にまとめた。ブラジル人児童の滞日2年未満の子どもからは、他表現の反応はなかった。

表3 ブラジル人児童と日本人児童の他表現

	ブラジル人児童 (滞日期間別)			日本人児童 (学年別)		
	2～4年 (15人)	4～6年 (14)	6年以上 (13)	1年生 (95人)	2年生 (96)	3年生 (92)
【使役形】 (ヲ) 怒らせる	0人 (%)	0	2 (1.42)	4 (4.21)	7 (7.29)	1 (1.08)
【授受表現】 (ニ) ほめてもらう	1 (6.66)	1 (7.69)	3 (21.42)	9 (9.47)	6 (6.25)	5 (5.43)
【自動詞】 (ニ) 挟まる	2 (13.33)	0	2 (14.28)	20 (21.05)	25 (26.04)	32 (34.78)
【可能形】 使える	0	1 (7.69)	6 (42.85)	16 (16.84)	18 (18.75)	9 (9.78)
【使役形】 (ニ/ヲ) なめさせる	1 (6.66)	2 (15.38)	1 (7.14)	2 (2.10)	6 (6.25)	4 (4.34)

表3の反応の他にブラジル人児童からは(1)～(3)のような反応があった。

- (1) たろう君は犬(ニ)手(ヲ)なめてという
- (2) 新しい星が はっけんできた 【できる】
- (3) たろう君は犬(ガ)にげたといって 【引用】

日本人児童からは、(4)(5)の反応があった。

- (4) たろう君は犬(ガ)おいかけてきたのでないでした
- (5) たろう君(ガ)たたいたのでないです

日本人児童の3学年にわたって顕著だったのは、「逃げられる」「降られる」での反応であった。(6)～(9)のように、犬が逃げたことや雨が降ったこと理由にして回答している。このような形式の反応はブラジル人児童からはなかった。

- (6) たろう君は犬(ガ)にげたので、ないている
- (7) たろう君は犬(ガ)にげたのにきがついた
- (8) お母さんは雨(ガ)ふってこまっている
- (9) お母さんは雨(ガ)ふったのでせんたくできない

### 3. 3 文末部分の産出反応

第1節で助詞と文末部分の正誤の組み合わせについて見てきたが、ここでは正答でなかった文末の反応にはどのようなものがあったのかをまとめる。図2は、「正答」と「他表現」以外の反応を表したものである。ブラジル人児童の正答率が高かった表現を左から順に並べてある。図中の「能動態」とは、動詞を要求される受動態にせず能動態で答えるという反応である。「その他」は能動態以外の反応で、受身形活用の誤りや無答などを示す。

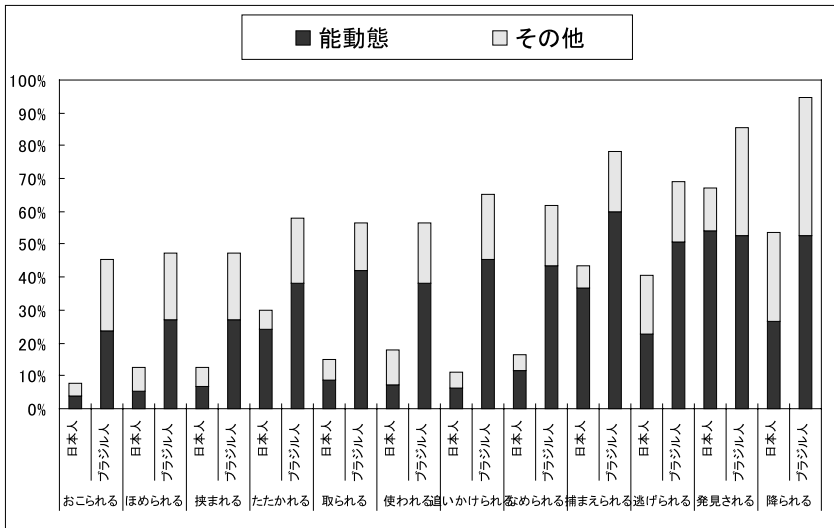


図2 正答と他表現以外の文末の産出反応：ブラジル人児童と日本人児童

この図から、「正答」と「他表現」以外の反応の中では能動態による反応が多いことがわかる。ブラジル人児童、日本人児童ともに右側の表現へ行くほどその反応率は高くなっている。つまり、受動態での産出が容易ではなかった表現から能動態による反応が多い傾向があると考えられる。

これらの反応の詳細について、以下に順に述べる。

#### 3. 3. 1 能動態

「能動態」は正答と他表現以外の産出反応の中で最も大きな割合を占めている反応である。能動態は以下のような場合である。

- (10) よし子さんはたろう君 (\*ガ/\*ヲ) \*つかまえるる/\*つかまえた

## (1) よし子さんはたろう君(二) \*つかまえている

図3は能動態反応における助詞(動作主を表す格助詞)の選択率を表したものである。助詞「二」の選択は正答であるが、文末が能動態である時、正答の「二」を選択した比率がどれだけあるか他の助詞の選択率と比べるために示した。

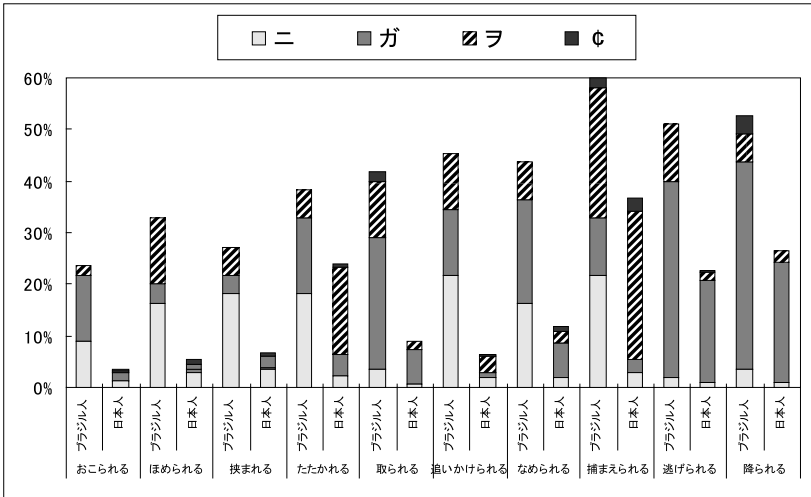


図3 「能動態」における助詞の選択率

この図から、表現によって選択されやすい助詞が異なっていることがわかる。「正答」「他表現」以外の産出反応では「能動態」による反応が最も多いが、その中でも正答率が高い表現においては正答である「二」の選択率が高くなっていることが図からわかる。正答である「二」以外で他の助詞と比べて助詞「ガ」の選択率が高い表現は、ブラジル人児童では「おこられる」「たたかれる」「取られる」「なめられる」「逃げられる」「降られる」である。「ヲ」は「ほめられる」「挟まれる」「捕まえられる」である。「追いかけられる」は「ガ」「ヲ」どちらも選択されている。

【間接受身】に分類される表現、特に【不利益】に分類される表現は「ガ」が選択されやすいことが顕著である。これらの表現では、文頭に主語として提示された被動作主とは関係なく、動作主を主語にした能動文を作っている。この点は日本人児童にも共通している。

一方【直接受身】に分類される表現は、表現によって選択される助詞が異な

る。「おこられる」と「たたかれる」は文頭で主語として提示された被動作主とは関係なく、動作主を主語にした能動文を作って、絵を正しく描写しているが、「ほめられる」「捕まえられる」は絵の事実と相反する能動文を作っている。「追いかける」はそのどちらの傾向もある。また、「挟まれる」では「たろう君はドアを挟む」という意味の通らない文ができています。

### 3. 3. 2 その他

正答や他表現、能動態ではないの反応を「その他」とした。助詞の選択がされていても文末が無答のものや受身形に活用させる際誤るもの<sup>(12)(13)</sup>、文末の動詞の語幹を無視した反応<sup>(14)</sup>や、動詞の語幹を用いても意味の通らない反応<sup>(15)</sup>である。

(12) たろう君はお母さん (ニ) \*おこはれています

(13) たろう君はおとうさん (\*ヲ) \*ほめれました

(14) たろう君はお母さん (ニ) \*おおきなこえで

(15) よし子さんはたろう君 (ニ) \*たたかあた

### 3. 4 各受身表現における産出反応の推移

ここまでは助詞と文末の動詞部分の正誤関係、文末部分の反応についてブラジル人児童、日本人児童の全体の傾向を見てきたが、本節ではブラジル人児童の産出反応が各表現においてどのように変化していったか、滞日期間別に分けて見ていく。図4～図15は、各表現の産出反応の推移を表したものである。図中凡例の1～4の番号は以下の4つの組み合わせを表す。

- 1 助詞の選択と文末動詞部分の両方が誤りの場合
- 2 助詞の選択は正答だが、文末動詞部分は受身形になっていない場合
- 3 助詞の選択は誤りだが、文末動詞部分は受身形で正答である場合
- 4 助詞の選択、文末動詞部分の受身形ともに正答である場合

また、これ以外のもので図4「おこられる」、図6「ほめられる」、図7「挟まれる」、図9「なめられる」、図12「逃げられる」に示されている凡例は「他表現」に分類される反応である。なお、助詞の選択がない表現「発見される」「使われる」は「3. 3 文末部分の産出反応」で示した「能動態」「その他」と、「他表現」に含まれる反応で分類し図に表した。

全体的に、滞日期間が長くなるにつれて助詞と文末動詞部分の両方が誤りというパターンが減少する傾向が見られる。滞日2年未満では、助詞の選択も文末動詞の態の部分も誤りであるというパターンが占める割合が高い。しかし、滞日2年以降ではそのパターンが減少する。代わりに、助詞の選択が正しくて

きるようになったり、文末部分だけ正しくできるようになる。表現によっては他表現が現れる。滞日6年以降になると、助詞・文末部分の両方が誤りというパターン以外の型や他表現の割合が圧倒的に多くなっている表現がほとんどである。

しかし、図13～図15の表現は、滞日期間に関わらず助詞と文末部分両方の誤りの比率は変化しない。「捕まえられる」はむしろ増加している。どれも正答率の低い表現である。

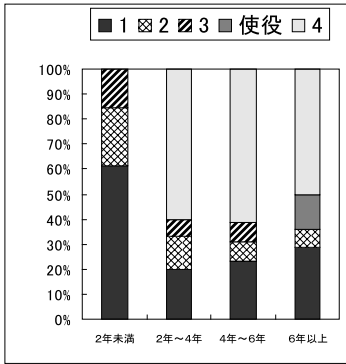


図4 産出反応の推移：起こられる

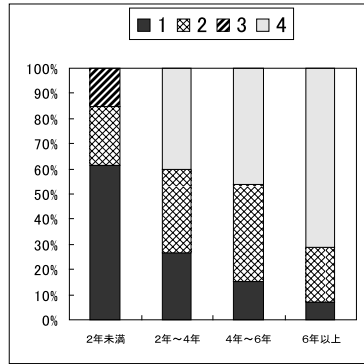


図5 産出反応の推移：たたかれる

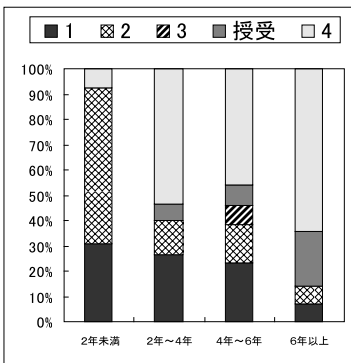


図6 産出反応の推移：ほめられる

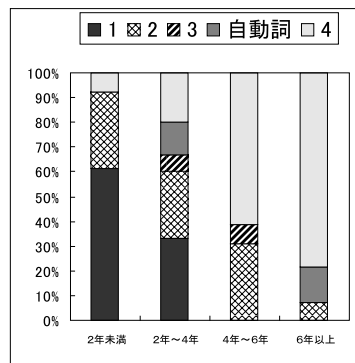


図7 産出反応の推移：挟まれる

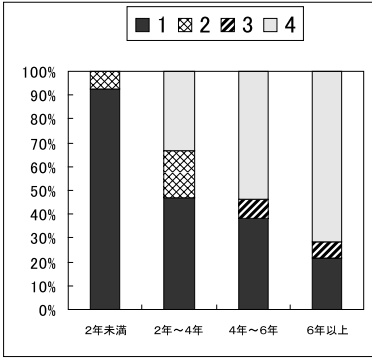


図8 産出反応の推移：取られる

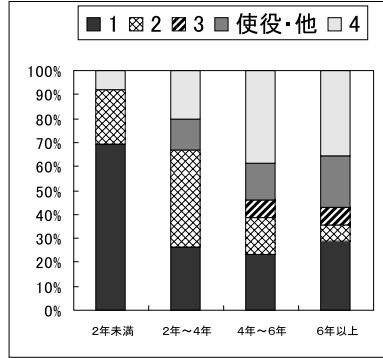


図9 産出反応の推移：なめられる

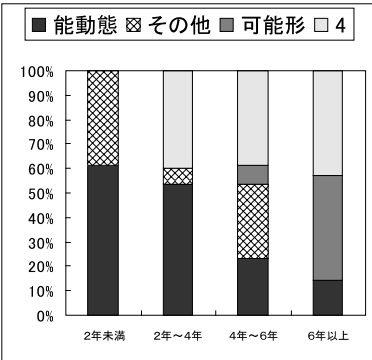


図10 産出反応の推移：使われる

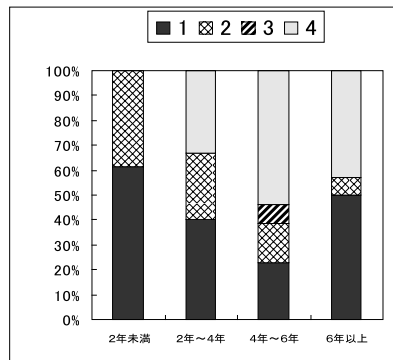


図11 産出反応の推移：追いかける

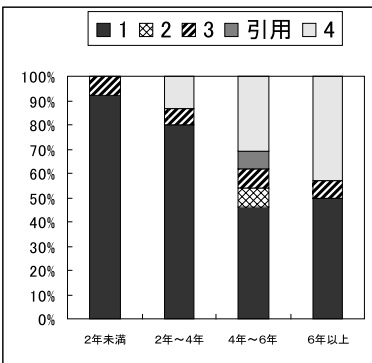


図12 産出反応の推移：逃げられる

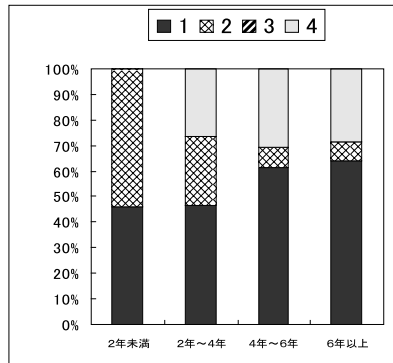


図13 産出反応の推移：捕まえられる

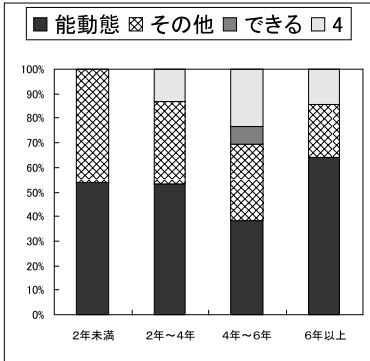


図14 産出反応の推移：発見される

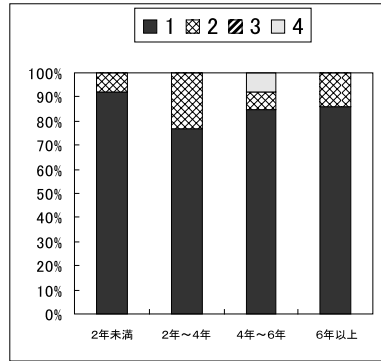


図15 産出反応の推移：降られる

なお、産出反応の推移からは、寺村（1982）と工藤（1990）による文法的分類ごとの特徴付けはできなかった。一部の表現を除き、文法的分類による表現には関係なく、助詞と文末部分の誤りは滞り期間が長くなるとともに減少していくことが明らかになった。

#### 4. 受身表現の発達順序

本調査における、提示された絵に合うように動作主の助詞を選択し文末を完成させる条件下で受身表現を産出させた際、次のような発達順序が示唆される。

- ① a. 助詞×動詞× → (減少)  
 b. 助詞○動詞× → ② b. 助詞○動詞× → ③ b. 助詞○動詞×  
 (c. 助詞×動詞○ → c. 助詞×動詞○)  
 d. 他表現 → d. 他表現  
 → e. 助詞○動詞○  
 (正答：受動態)

最初の段階（①）では、動作主の助詞の選択も文末の動詞部分の完成も誤っているもの（a）と、助詞が正しく選択できていても文末の動詞部分が受身形で完成されていない反応（b）が出現する。この時点では「a」の反応のほうが出現しやすく、動作主を主語にした能動文を作る傾向がある。次第に反応「a」は減少し、代わりに助詞を正しく選択できるようになる（②）。また、受動文で

はなく他の表現で絵に合う文を完成するようになる(d)。そして、次第に正しい受身表現が産出できるようになる(③)。しかし、③の段階になっても、助詞の選択は正しいが文末部分が誤っているもの(b)が、多くではないが残る可能性がある。受動文ではなく他の表現を使って、受動文を作ることを回避することも考えられる。また、文末部分の受身形のみが正確に産出できるという反応(c)の出現は、表現によって異なる。しかし、「助詞○動詞×」に比べて出現する可能性は低く、また受身表現の中でも正答率が高い、つまり産出が容易であると考えられる表現で出現することが示唆される。

以上の点から、「仮説：受身表現を習得する基本的な発達プロセスは、(動作主)助詞×+文末動詞の態×→助詞(ニ)○+文末動詞の態×→助詞(ニ)○+文末動詞の態○:受動態 である」という仮説を基本的に支持する。ただし、その順序は明確に示すことができたのではなく、順序性を示唆したという記述に留める。

## 5. まとめ

本稿では、ある一定の条件下で日本語の受身表現を産出させるという調査法を用いて、ブラジル人児童の受身表現の発達順序について考察を行った。これらをまとめると以下ようになる。

- 1) 受身表現の発達順序の基本的なプロセスが示唆された。文末の受身形ではなく、動作主を表す助詞「ニ」から先に習得していく。
- 2) ブラジル人児童、日本人児童ともに文末部分を「動詞を要求される受動態にせず、能動態で答える」という反応が多く産出された。これは、特に滞日期間の短い子ども達に多く見られ、被動作主を主語にした提示があるにも関わらず、動作主を主語にした能動文を作る傾向がある。絵の内容とは逆の場合もあった。
- 3) 滞日2年未満のブラジル人児童からは、受動文ではなく授受表現などの他の表現(他表現)による産出は見られなかった。他表現は、滞日2年以降で初めて産出され、正答率が高い受身表現でも観察された。

今後は、「他表現」の反応で現れた可能形や使役形、授受動詞の習得や、それらの受身表現習得との関わりについても追究していきたい。

## 引用文献

- 工藤真由美 (1990) 「現代日本語の受動文」『ことばの科学』 4 : 47-102 むぎ書房
- 鴻野豊子 (1998) 「在日外国人児童・生徒における日本語の主観表現の習得」『言語科学研究』 4 : 61-75
- 田口香奈恵 (2001) 「ブラジル人児童の受身・使役表現の習得に関する事例研究—日本人児童・幼児との比較を通して—」『第二言語としての日本語の習得研究』 4 : 116-133 第二言語習得研究会
- 田口香奈恵 (2002) 「ブラジル人児童の受身表現の習得に関する実証的研究—日本人児童との比較を通して—」『2002年度日本語教育学会春季大会予稿集於お茶の水大学』, 155-160.
- 田中真理 (2001) 『日本語の視点・ヴォイスに関する習得研究：英語、韓国語、中国語、インドネシア語・マレー語話者の場合』国際基督教大学大学院比較文化研究科提出博士論文
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 松本恭子 (2000 a) 「[縦断調査研究] ある中国人児童の来日 2 年間の動詞形態素使用実態—縦断調査結果と日本人児童、及びロシア人児童との比較—」『南山日本語教育』 7 : 115-127 南山大学大学院外国語研究科
- 松本恭子 (2000 b) 「ある中国人児童の来日 2 年間の助詞機能の使用状況—発話資料と作文資料の縦断調査報告—」『日本語教育論集』 16: 1-22 国立国語研究所
- 松本恭子 (2001) 「ある中国人児童来日 3 年間の動詞形態素使用の実態—発話と作文の縦断調査記録：日本人児童や他の外国人児童との比較—」『日本語教育学会春季大会予稿集於東京女子大学』, 200-206.
- 森山新 (2000) 『新日本語学研究業績書NO.1 認知と第二言語習得』明啓出版